

連載

## 21世紀にふさわしい経済学を求めて

## 第20回

桑垣豊

(NPO 法人市民学研究室・特任研究員)

【これまでの連載（掲載ページへのリンク）】

[第1回](#) [第2回](#) [第3回](#) [第4回](#) [第5回](#) [第6回](#) [第7回](#) [第8回](#) [第9回](#)  
[第10回](#) [第11回](#) [第12回](#) [第13回](#) [第14回](#) [第15回](#) [第16回](#) [第17回](#) [第18回](#)  
[第19回](#)

第1章 経済学はどのような学問であるべきか（第1回）  
第2章 需給ギャップの経済学 保存則と因果律（第2回と第3回）  
第3章 需要不足の原因とその対策（第4回と第5回）  
第4章 供給不足の原因と対策（第6回と第7回）番外編 経済問答その1  
第5章 金融と外国為替市場（第8回と第9回）  
第6章 物価変動と需給ギャップ（第10回）  
第7章 市場メカニズム 基礎編（第11回と第12回）  
第8章 市場メカニズム 応用編（第13回と第14回）番外編 経済問答その2  
第9章 労働と賃金（第15回）  
第10章 経済政策と制御理論（第16回）  
第11章 経済活動の起原（第17回と第19回）  
番外編 経済問答その3（第18回）  
第12章 需要不足の日本経済史（第20回）

## 第12章 需要不足の日本経済史

第11章につづいて、経済の歴史をえがきます。21世紀にふさわしい経済学を求めるこの連載では、まず近現代の経済現象をあつかいましたが、近代以前の経済にも当てはまるわくぐみづくりにも挑みます。需要不足というマクロ経済固有の現象は、経済学の有効性が試される場です。経済の歴史にその場を移して、需要不足の日本経済史をテーマにします。

本格的に国単位のマクロ経済が需要不足に陥るようになったのは、20世紀になってからです。人類の歴史とともに続いた生産力の制約（供給力不足）は大きな課題ですが、これは常識的な発想でもわかることです。いろいろな産業や制度の進歩の積み重ねが、生産力を高めていきます。

しかし、供給力不足の時代にあっても、分業、交換、余剰生産、蓄積、貨幣の発達につれて、一時的ながら需要不足が生じるようになります。

日本の歴史をたどれば、旧石器時代には、長野県で石器製作の専門集団があらわれ、分業、交換のはじまりを示唆しています。石器の作りすぎはありえたのでしょうか。最近、縄文土器にコクゾウムシの痕跡がみつき、食糧を貯蔵していた可能性が高まっています。貯めた食糧を腐らせてしまうことはなかったのでしょうか。古墳時代から、制度としての税の徴収がはじまったようですが、納税のための備蓄は膨大です。また、律令制の元で生産力が大幅に増え、制度も整います。やがて、律令制が限界を向かえて、そこからの転換をはかった菅原道真と藤原時平が税制改革を実行します。鎌倉時代から室町時代には、金融業が発達します。庶民が生活費も借りるようになり経済格差が拡大し、経済運営がどうようもなくなって徳政令の発令にいたります。

江戸時代中期、人口増加が止まると、米の生産が頭打ちになるかわりに、商品作物や手工業が成長をはじめ、豊作貧乏という現象があらわれます。静止人口となる元禄時代から、米の過剰生産は米価安を招き、禄を米の現物支給に頼っていた武士階級は、町民・農民から借金をするようになります。余剰米は、酒造りや菓子類の原料とすることで、需要不足・過剰生産を免れたのでしょうか。武士や幕府・藩の借金常態化は、幕府の金融政策がはじまる契機ともなります。

生産力過剰常態での貨幣改鑄=貨幣供給増大=幕府の貨幣発行益は、金融緩和政策の先駆けとも言えます。需要不足を認めない新古典派経済学に通じる発想の新井白石は、貨幣改鑄を主導した荻原勘定奉行を収賄の濡れ衣で失脚させます。貨幣の金含有率を元に戻した結果、緊縮財政となり景気は失速します。徳川吉宗政権の末期、大岡越前の進言により貨幣改鑄を復活させるまで景気は回復しました。江戸時代は、町人による新田開発(町人入用)という巨額の先行投資がはじまる時代でもあります。

イギリスの経済学者ヒックス晩年の著作『経済史の理論』に見習って、日本史に需要不足・過剰生産の起源をさぐります。ヒックスはその晩年を、貨幣と資本の存在と不確実性の関連を歴史の中に探ることで、新たな経済学の構築をめざしました。キリスト教圏ではない日本には、利子へのタブーが少ないなど、西洋にはみられない経済の歴史があります。平安時代までは第11章で論じましたが、需要不足の観点から整理し直します。鎌倉時代以後は、需要不足と金融業の発達、格差社会、武家政権などの関係を論じます。

※今回も登場する写真はいずれも筆者の撮ったものです。

## 12-1 余剰生産・流通・蓄積・貨幣・金融・投資・需要不足

まず、関連する用語を解説します。

### 【余剰生産】

需要不足という表現は、産業革命以後の工業化の時代に特有の現象を思わせる表現です。それを広い意味で考えて、「余剰生産」の現代的あらわれが「需要不足」であるとします。余剰生産は、当面の衣食住以上の生産を指すとすると、自分や家族、集落以外の人の分も生産するという同時時代的な「流通」と、短い期間も含めた将来のための生産「蓄積」があります。流通に備えた蓄積もあり、両立することもあります。

### 【流通】

流通を前提とすると、流通先で必要のなくなる可能性がある以上、過剰生産が生じます。規模が大

きくなれば、過剰生産も大きくなります。輸送手段・交通網の発達と連動して流通が拡大し、生産量・生産物を選ぶ必要も生じます。情報伝達の方法も発展します。古代、律令制の規定に狼煙(のろし)があり、すでに人間の移動と情報伝達を切り離す試みが始まっています。

### 【備蓄・蓄積】

製品の備蓄・蓄積だけでなく、原料・中間原料の備蓄もあります。備蓄品の耐久性もあり、保存技術の進歩が蓄積量を増やします。やがて、貴金属や貨幣、為替などの形の蓄積も登場します。

### 【貨幣】

ものだけが流通する物々交換の段階から、ものの中から流動性の高く保存もきく米・布・塩などが特別の地位を築くようになります。これが実物貨幣です。日本では平安時代後期に、貨幣を発行するのをやめて、実物貨幣が経済活動を支えます。やがて、金属貨幣が復活し、紙幣(藩札)・預金通貨などに発展します。現代の需要不足は、貨幣抜きには考えられません。

### 【金融】

貨幣がなくても、貸し借りはありました。貨幣とともに、本格的に金融活動が始まります。ただし、実物の貸し借りの情報だけがまず成立して、後にそれが貨幣につながります。シュメール文明では、経済活動の記録として文字(情報記録手段)が誕生しました。

### 【投資】

その場限りの消費でなく、後に生産活動につながるものは投資です。その意味で、石器や弓矢も投資と言えます。ただし、寺社建築や現代の公園設置や美術館建設は、長期的には生産に寄与するかも知れませんが、生産とはつながらなくても先々の生活のためになるという意味で投資です。会計学的には、決算年度を超えて、効用をもたらすもの(資産価値の残存)は投資です。将来、役立つかどうかかわからないという意味で、投資は過剰生産につながる大きな要素であり、現代経済の需要不足の主役です。

### 【需要不足】

長く生産力不足のみが、貧しさや不景気の原因であると考えてきました。しかし、巨額の投資を行うようになってから、単なる過剰生産という以上の意味で、需要不足が問題になります。過剰貯蓄とという側面です。これは、経済学では、「家計」の貯蓄・格差だけが大きな原因としてきましたが、21世紀になるころから、法人貯蓄が無視できなくなりました。無理に財政再建を図ろうとする巨額の債務返済も、単年度で見ると過剰貯蓄です。21世紀中盤には、政府による需要不足も大きな問題になりそうです。

## 12-2 旧石器時代・縄文時代 交換・流通のはじまり

日本の旧石器時代は、遺跡捏造事件を乗り越えて、島根県砂原遺跡(旧石器時代前期)などの発見によって、12万年前ごろまでに始まっていたことが明らかになりつつあります。ただし、その生活実態は未解明で、当時の生産技術では余剰生産があったとは言えそうにありません。しかし、4万年前以後の旧石器時代後期になると、それまでの常識を塗り替える流通の実態が明らかになりつつあります。

### 【参考文献】

『旧石器が語る「砂原遺跡」 遙かなる人類の足跡をもとめて 山陰文化ライブラリー6』  
松藤和人、成瀬敏郎 ハーベスト出版 2014年

## ■遠洋航海

日本列島は、氷河期になって海が退いて大陸と陸続き（あるいは狭い海峡）にならないと、人類が渡ってくることはできません。島根県砂原遺跡の旧石器時代前期の人類は、18万年前ころを中心とする氷河期に渡ってきたと思えます。4万年前以後の旧石器時代後期の人類は、2万7000年前ころを中心とする氷河期より以前から居住しているので、遠洋航海をしていたことは間違いありません。

考古学者が台湾から沖縄への航海実験を行っています。1回目は、潮の流れが強くて人力では到達できませんでした。ただし、これは最短距離を渡ったに違いないという思い込みがあるための失敗でした。潮流をおりこんで、台湾南部から与那国島を目指せば十分可能であるはずだと思っていたところ、2回目はそのとおりにして成功しました。

流通という観点から遠洋航海が現実化していた例は、伊豆諸島神津島（こうづしま）近くの恩馳島（おんばせじま）の黒曜石を継続的に採取して、本州に持ち帰っていたことです。伊豆諸島までは海が深く、氷河期でも50kmの航海が必要です。中部地方や関東地方の内陸部から、神津島の黒曜石が見つかっています。黒曜石の成分分析で産地がわかりました。オーストラリアでも5万年前の遠洋航海があったことがわかってきたので、世界史の常識はくつがえりつつあります。この遠洋航海は、縄文時代にも続きます。

遠洋航海で採取に行く以上、まとまった量を運んだことになり、原石・成型品のいずれにしてもどこかに蓄積していたのは確かです。船をつくり、食料を積んで、労力を投入しながら、採取した黒曜石がさばき切れない事態があったとすれば、過剰生産（採取）です。霧ヶ峰、高原山、箱根など、競合する産地もあったので、時期をはずせば不要となったかも知れません。長期保存が可能なので、必ずしも余るとは限りませんが、検討する価値はあります。

### 【参考文献】

『旧石器時代ガイドブック ビジュアル版』堤隆 新泉社 2009年

## ■石器制作集団と交換

日本では、旧石器時代後期後半、石器の量産集団が長野県小県郡長和町の霧ヶ峰黒曜石産地近くの「鷹山遺跡」に現れました。写真の星糞峠はその産地です。他の家族や集団のための分の石器もつくっていた専門集団があったようです。石器づくりに多くの時間をさくと、食料獲得の労働時間が確保できなくなります。そうすると、足りない分を外部から調達していた可能性があります。交換の始まりです。直接の証拠が遺跡から出てきた訳ではないので仮説ですが、検証に値するのではないのでしょうか。



写真12-1

黒曜石の産地 長野県長和町星糞峠

ここでも過剰生産の可能性があります。旧石器時代は、地表面にある黒曜石を拾うだけだったので、労働投入は少なく、需要に応じた生産であった可能性も高いです。また、移住生活の旧石器時代は、人間の移動と物の流通は重なります。日本の旧石器時代は例えば、夏は中部高原地帯、冬は関東平野という1年サイクルで、100kmほど移住するのも普通でした。輸送集団や受け渡し式の交換を想定する必ずしも必要はありません。

## ■ヒスイとコハク

縄文時代になると定住するので、輸送集団や受け渡し交換の可能性は高くなります。特に、新潟県糸魚川市のヒスイと、千葉県銚子市のコハクは、広域流通していました。気候が温暖な時期は流通量が多く、寒冷化すると減りました。1000年単位の気候変動と景気変動が同期していました。生産余力がなくなると流通が減るとすると、余剰生産力が存在したことになります。必需品だけでは余ってしまう生産力を、このような装飾品製造に当てるということは、需要不足対策と言えるのかも知れません。



写真12-2

糸魚川市長者ヶ原遺跡(ヒスイ産地工房)

ヒスイとコハクの流通地域は中部地方で重なり合っていましたが、遺跡から見つかるのは拠点集落だけです。集落間に格差があったことを示唆していて、集落の中での身分の違いもうかがえます。縄文時代に平等社会を見いだそうする人には期待外れかも知れませんが、格差や身分は分業を示しているのかもしれない。縄文時代は予想以上に、分業社会だったかも知れません。分業は生産品の種類による生産量の変動が、需要不足につながります。

## 12-3 「弥生分銅」発見

2012年、30年前発掘の大阪府八尾市と大阪市にまたがる亀井遺跡からみつかった石製品が、分銅(定量の重り)であることがわかりました。一番小さい円筒形の石製品が8.76gでしたが、一緒に見つかったそのほかの石製品の重さがその2の累乗倍2~32倍の重さであることに森本晋氏が気付きました。計10個の石がセットで見つかったので、重りであることは間違いありません。考古学者は金属、石を問わない言い方として「権」と呼んでいます。この同じ基準単位の重りは、弥生時代の大阪府池上曾根遺跡、奈良県唐古・鍵遺跡、島根県古八幡遺跡(付近)からも見つかっています。前の2つは大型拠点集落で

す。

これは、薬や顔料などの成分を測るための工業用という説と、市での交易用という説があります。市であれば、余剰生産物の取引をしていたこととなります。顔料などの精密な測定をおこなっていたとすると、意外に高度な技術を示唆していて、生産力が高さ(余剰生産)をうかがわせます(写真11-2「跡部神社」参照)。

時代は変わり古墳時代ごろの成立であると思える古代市に、阿斗の桑市(あとのくわいち)があります。これは亀井遺跡のすぐ東側も候補地です。阿斗の桑市の最有力候補地は、奈良県田原本町なので違う可能性も高いですが、市の存在を否定するものではありません。この関連を指摘している考古学者はいないようですが、分銅が市と関係している可能性があります。この辺りには古代道路の磯齒津道(しぎつみち:のちの八尾街道)が通り、物部氏の拠点がありました。ちなみにこの市と同じころにあったと思える古代三市は、海柘榴市(つばいち:奈良県桜井市)、軽市(かるいち:奈良県橿原市)、餌香市(えがのいち:大阪府藤井寺市)です。日本書紀掲載から考えて、古墳時代に相当します。

## ■金属製品

金属製品の使用・生産は、弥生時代から始まります。農具などが鉄製になるなど、生産性を向上させました。広域支配の権威となる銅鐸などもつくようになります。

古墳時代が始まると、金属製のまつりの道具は、弥生時代の銅鐸にかわって、鏡が登場します。島根県加茂岩倉遺跡は、銅鐸の大量廃棄場所らしく、この交替劇を示唆します。技術の高度化を示すとともに、古墳副葬品として鏡が登場するのですが、はじめは中国からの輸入品(朝貢品)でした。

弥生時代の本格的農業稲作の開始は、豊作貧乏の始まりであったかも知れません。秋に収穫時期があるということは、年単位の蓄積を必要とし、備蓄による需給調整が必要になります。兵庫県尼崎市に再現してある田能(たのう)遺跡の高床の米蔵の説明には、「出入り口の扉はなく米を出すときは壁板を壊した」とありました。収穫前の供給不足対策ですが、収穫直後に食べ過ぎないようにということです。密閉式米蔵は、年を超える需給調整にも役立ったかも知れません。

## ■古墳造営の労働力

弥生時代の円墳や方墳に比べると、古墳は桁違いの大きさのものが出現します。本格的な前方後円墳のはじまりは、3世紀ごろですが、広域の労働力を動員できるようになったことを示しています。広域支配は、農地開発や灌漑が大規模になり、生産性の向上につながります。労働力や灌漑技術(土手の築造、掘割技術)が古墳にも生かされました。

労働力調達は、奴隷のような強制だったのか、律令制の庸(よう)のように税の一種であったのか、自発的奉仕であったのかは、不明です。食糧生産のため以外の労働力にも余剰がないと不可能であったと思え、収穫が多く見込める年に古墳造営を行った可能性があります。考古学の成果によると、古墳の築造は埋葬主の生前の何年も前から進めているのがわかっているので、工事の進捗速度は景気(気候)にあわせて調整可能でした。発掘の裏付けがあるわけではないので、私の仮説です。



写真12-3

箸墓(はしはか)

最初期古墳(奈良県桜井市)

## 【参考文献】

『弥生時代の歴史』藤尾慎一郎 講談社現代新書2330 2015年

『はかりの文化史』(展示図録)大阪商業大学商業史博物館 2018年

## 12-4 飛鳥時代・奈良時代・平安時代 金属貨幣のはじまりと律令制

飛鳥時代には、律令制、金属貨幣、寺院、巨大都城が登場し、生産性の向上が制度や土木建築の発展につながります。やがて、その成長が各地の自立をうながし、平安時代中期から中央集権を前提とする律令制が形骸化し中世に向かいます。

## ■貨幣・市・藤原京

飛鳥時代に入ると、7世紀後半、はじめての貨幣富本銭(ふほんせん)が天武天皇の時代に登場します。富本銭は、このころ始まった本格的都城「藤原京」(当時の呼び方は「新益京:あらましのみやこ」)建設の労働力確保のために発行したことはすでに述べたとおりです。794年に遷都する藤原京には市があったことがわかっていて、建設労働者などが受け取った銭を使う場になったようです。全国から現物納入の税で届く物品を、この市で貨幣や米、布などと交換したのでしょう。市で銭を使うことを禁止したという記録がありますが、一時期だけではないかと思えます。また、禁止したということは使おうとする人が多かった証拠です。

藤原京には、宮殿の北のほうに中市があったことがわかっています。現在もその付近に市杵島(いちきしま)神社があります。また、古代三市のひとつ軽市(かるいち)は平城京でいう西市付近(軽の衢:かるのちまた)、都の東北のあたりには海柘榴市(つばいち)がありました。

## ■律令制と市

律令の規定で、都の東半分と西半分を統治する左京職と右京職をおきました。その下に、東市、西市を管理する市に司(いちのつかさ)があり、物価調査を担当する価長(かちょう)をおきました。市には、固定価格、半固定価格、自由価格の3つの価格設定方式がありました。半固定価格のことを沽価(こか)といい、物価調査に基づいて、公定価格を調整していたといえます。市による需給調整のはじまりですが、どこまで有効であったかは、今のところわかりません。

律令の規定では税を現物納入させたので、全国からの輸送手段が必要でした。10メートルを超える

幅の古代道路の建設がはじまります。奈良盆地や大阪平野にあった直線の大道(おおみち)を全国に広げることになりました。この大道や港への道や川の交差する地点(ちまた:道又)に、市が成立します。

奈良時代、正倉院文書に東大寺写経所の実務記録が残っています。管理職は常勤の職員でしたが、実際に写経したのはアルバイトで給料は米でした。市では、米、布などの流動性の高いものが、いろいろなものと交換できたことがわかります。銭の使用もあったかも知れないことも指摘しました。写経所文書には、給料の前借りを求める文書も残っているので、金融行為につながります。

## ■律令制と土木建築業

飛鳥時代には、豪族のシンボルは、古墳から寺院に変わります。そして、文書行政も始まり、官僚化した豪族配下の者たちは事務能力を求められます。土師(はじ)氏は、古墳や埴輪、ため池の建設・製造を家業としていましたが、業種転換をはかります。奈良時代に土師氏から、菅原氏に改姓届けを出しました。菅原道真の先祖です。奈良市西大寺の南に菅原町がありますが、そこが菅原家の出身地でその地名を一族名にしました。菅原天満宮や菅原寺(喜光寺)もあります。菅原町の上流に菅原池(現在は蛙股池・あやめ池)がありますが、人工的に堤を築いた日本初のダムだといえます。土師氏がつくったのでしょうか。

奈良時代には古墳が時代遅れになった証拠があります。平城京の北辺の平城天皇陵は円墳だということになっていたのですが、都建設のために前方後円墳の南半分を壊したために、円墳に見えるようになったことがわかりました。それにとまって、平安初期の平城(へいぜい)天皇の墓ではないこともわかりましたが、名称はそのままです。

古墳築造から寺院建設へと余剰生産の使い道が変化すると同時に、管理業務の発生がさらに生産性を高めました。中世には、寺院建築のために集めた資金を建設までの間運用するようになります。これを祠堂銭(しどうせん)といえます。



写真12-4

菅原天満宮(奈良市菅原町)

## ■律令制と富の配分

律令制では、口分田制度により、庶民には男女ともに生まれると同時に農地を与えられることとなりました。その見返りに税の負担も義務化します。奴隷(奴婢)にも口分田がありました。生産手段の平等な配分は経済格差を縮小したでしょう。貧困層が減ることで、需要不足が生じにくくなったはずですが。律令制の押し付けとも言えますが、律令制による耕地整理、品種改良、農機具の貸し出しなど農業技術の進歩が生産力を増やしました。中央からの技術供与で生産性が高まることで、豪族たちも納得し、位階と給料(現物)と引き換えに、土地の公有化に協力したのではないのでしょうか。この時代に中央集権が可能に

なります。

しかし、やがて各地で独自に農業技術を身につけるようになると、中央に依存する必要性が低くなります。自由裁量の必要性から、国司の受領化、人頭税である口分田制度から土地税制への変更が、中世への道を開きます。藤原時平と菅原道真の税制改革（延喜の改革）です。国司頭（こくじのかみ／知事）の受領（ずりょう）化とは、必要経費を差し引いた上で規定の税を国に収めればその方法は問われないようになることです。国司の権限は大幅に増え、利権の大きなポストになります。口分田による班田が実行できなくなり税務が滞ったため、現在の土地の所有者から面積当たりで税を収めさせることに変更したのです。藤原氏は、道真を左遷することでこの成果を独占したかったという説がありますが、太宰府左遷の真相はまだ不明のようです。

#### 【コラム】平安時代後半に金属貨幣を発行しなくなった理由

10世紀中頃を最後として、国家による貨幣の発行をやめてしまいます。貨幣を使うことを禁止したわけではありませんが、だんだん消耗して減っていきます。貨幣と並行して使ってきた実物貨幣である米、布、塩などが、流動性（交換性）の高い通貨として交換の主役になります。それでも、通貨単位の「文」は残ります。

ちなみに「疋・匹（ひき）」という単位で価格表示することがあります。これは、布の長さの単位で2反が1疋・匹ですが、1反はだいたい11メートルだといいます。幅はだいたい1尺（約38センチ）ぐらいという標準的な幅を想定しています。1反は、もともと一人分の着物が縫える量です。もちろん、地域や時代によって違いがあります。この長さ（面積）の絹の布の価格を単位とするのが疋・匹です。

金属貨幣を発行しなくなった理由は、通説では定着しなかったからということですが、皇朝十二銭というように10回以上も発行しているのに、定着しなかったとは思えません。また、この時期に発行をやめた理由も説明できません。実は決定打になる説明はないのですが、以下のような理由が複合して働いていました。

▼銅が不足して価格が上がり、材料・加工費用以上の額面価値にできなくなった

▼中国唐王朝が9世紀はじめに滅びて分裂状態になり輸入するような強力な貨幣が存在しない

▼全国各地（国）から都に税物（ぜいもつ）を運ぶときに、国衙（こくが）の必要経費分（今の県財政）を差し引いて送ることになったので、決済用通貨の必要量が減った

最後の理由は、私が思いついた仮説なので、くわしく説明します。建前では、各国（各地）の税金は一旦都に運んでから、国衙の必要経費に当たる分の米や布などを、各地に持ち帰ることになっていました。しかし、人力や牛馬、小型船しかない時代にそんなムダなことをしたのでしょうか。

はじめは、そうしようとしたかも知れません。こんな方法がありえます。記録だけで運んだことにして、都の市で貨幣で現物を調達して大蔵省に収めます。その後、必要経費分を現物で返してもらったら、それを市で売って貨幣を取り戻せば、運ばなくて済みます。そして、同じ現物が何回も市と大蔵省を往復すれば、現物はそれほど必要ありません。市で貨幣を使うのを禁止したのは、このことが原因かも知れません。しかし、そんなことをすると市の機能を損ないます。

中世になれば、借金証文が流通して貨幣のような働きをしますが、平安時代には貨幣しか手段がありません。菅原道真らの税制改革で、建前上も国衙の必要経費を一旦都に運ばなくてよくなれば、その分の銭の役割は縮小します。私の新説です。

## 【参考文献】

- 『日本古代貨幣の創出 無紋銭銀・富本銭・和同銭』今村啓爾 講談社学術文庫2298 2015年  
『律令制とは何か』大津透 山川出版社 2013年  
『古代道路の謎 奈良時代の巨大国家プロジェクト』近江俊秀 祥伝社新書316 2013年  
『消された政治家 菅原道真』平田耿二 文春新書115 2000年  
『摂関政治と菅原道真』今正秀 吉川弘文館 2013年  
『通貨の日本史 無文銀銭、富本線から電子マネーまで』高木久史 中公新書2389 2016年  
『金・銀・銅の日本史』村上隆 岩波新書新赤1085 2007年

## 12-5 鎌倉時代・室町時代 金融業のはじまり

この時代、荘園などの余剰金、寺社への寄進を原資に金融業が発達します。収穫前のつなぎ融資からはじまり、室町幕府やその御家人の支出を支える役割を果たします。格差社会が借り手を増やし、農村社会が全体として返済不可能の事態が常態化して、徳政令発令の土壌になります。応仁の乱のあと、守護大名が独立性を高めて戦国大名になり、徳政令に頼らない安定した体制をめざします。

## 【背景】

借り手と貸し手の状況が中世になり変化します。

## ▼借り手

- ・中世は、納税の金納化など、市場原理が広まるにつれて、格差が拡大し借金需要につながる。
- ・収穫前の季節に資金が不足するつなぎ融資需要。
- ・室町時代初期の天候不順で融資需要が増える。
- ・室町幕府は日明貿易中止などで財政難になる。
- ・南北朝動乱からの復興政策で寺社を勢力下においた室町幕府が、寺社に將軍の御成りイベントを行う。接待費を工面するために寺社が借金をする。(東寺百合(ひやくごう)文書より)

## ▼貸し手

- ・鎌倉幕府御家人が、承久の変で西日本領を得て、経営を委託する。その委託をうけたのが、金融業者の借上(かしあげ)。延暦寺(山門)の下級僧侶、貴族の下人が借上になり、金融業を兼業する。荘園経営での利益の運用が原資。
- ・室町時代には、寺社への寄進:祠堂銭(しどうせん)の運用をまかされた借上が専門化して、土倉(どそう)などと呼ばれるようになる。後にその土倉(投資家)が、資金運用を専用に行う土倉沙汰人(運用ファンド)に資金を委託して、運用の専門家が誕生する。
- ・地域金融が天候不順などで融資の余裕をなくし、土倉など広域金融にたよるようになる。
- ・室町幕府が「雑務沙汰(ぞうむさた)」訴訟制度を整えて、民事訴訟の基盤ができる。

## ■鎌倉時代の金融

例えば、京都府八幡町の石清水(いわしみず)八幡の離宮が、淀川を挟んだ向かいの京都府大山崎

町にあり、その神人(じにん)が油や酒の製造、販売の特権を与えられていました。その稼ぎが原資となり、金融業を兼業しました。このように寺社勢力と結び付いた産業が、金融業にも進出します。



写真12-5

京都府大山崎町 離宮八幡宮(油商人の神)

## ■室町幕府の財政基盤

日明貿易が止まると、幕府は、利益をあげている土倉や酒造業者から税金をとる「土倉酒屋役(どそうさかややく)」を設けます。その他、様々な業者から営業税を取る「諸商売役(しょしょうばいやく)」、都市の店などから開業税を取る「地口銭(じぐちせん)」、農地から土地税を取る「段銭(だんせん)」などを強化する。これらは臨時税制ですが、たびたび発令します。

室町幕府は、1454年、貸し手借り手双方から訴訟を受付け、貸し出し額の1割の手数料で、謝金の棒引きをしたり、債権の保護をしたりする法令を定めます。2つは矛盾するので、早い者勝ちでした。分一(ぶいち)徳政令です。財政難を理由になりふりかまわず、金融に介入したのです。応仁の乱後、土倉が衰退すると税の基盤があやうくなります。

## ■徳政令

よい政治を行う普通名詞が、借金棒引き政策の名前になります。はじめは、借金づけの農村が集結して、借金棒引きの徳政一揆をおこしますが、室町幕府自体が、御家人の借金などを帳消しにする意図などもあり、徳政令を発令します。10年以内に売った土地を、ただで「元の持ち主に返す」のが徳政の最初の主旨でしたが、借金返済免除も加わります。売った土地を元の持ち主に返すなどというのは、すでに述べたシュメールの徳政令そっくりです。一種の格差是正策ですが、劇薬であるので社会は混乱します。へたに徳政が行き渡ると、次に借金ができなくなるので、いろいろ条件をつけて貸すようになります。

例えば、一定以上の金額や、元利が元本の2倍を越えた債務を対象とするので、すべての借金を棒引きするわけではなくする。利子の元本組み入れなどで対象から逃れようとする方法や、自分たちの集団だけは徳政から逃れようと比叡山(山門)が圧力をかけたりして、複雑な様相を呈します。比叡山延暦寺と一体であった日吉(当時:ひえい/現在:ひよし)大社は、神輿をかついて幕府の役所に乱入し「要求を飲まなければ神罰があたる」と徳政対象からはずすように強く訴えました。その結果、土地の売却は徳政対象外にするなどの条件を獲得します。

そして、室町幕府財政のところで述べたように、幕府が手数料を取って徳政免除の証文を出すなどというのは、混乱のきわみです。



写真12-6

日吉大社の神輿(大津市坂本/2018年4月12日撮影)

### ▼用語解説

【寺社勢力】貴族、武士と並ぶ第3勢力として領地を持つ。神仏加護の元で利息付き金融を。

【借上(かしあげ)・土倉(どそう)】当時の金融業者の呼び方。寺社勢力関係が多い。

【土倉寄合衆】土倉への出資者

【土倉沙汰人】土倉から預かった金を運用する

【祠堂金金融】永代供養など寄進金を運用

### ■まとめ

平安中期(西暦900年頃)、菅原道真、藤原時平の税制改革で、人頭税(律令制)から土地税制に移行し、中世的経済への変換が始まる。平家政権・鎌倉時代初期から、中国を占領したモンゴルが紙幣を利用、余った宋銭が日本に流れ込むことで、貨幣経済が復活する。

律令制の空洞化は市場原理の広まりにつながり、格差が拡大するが、収入不足による「需要不足」を借金が埋める。しかし、借金が累積して農村が全体的として返済不能になる。それが、借金帳消しを意味する徳政を求める徳政一揆に発展する。

所得格差拡大によるマクロ経済のバランス喪失(=需要不足)を借金が補うが、長期の借金累積は解消不可能となり、徳政令発動に至る。

その後、借金主体が多様化して、一律に徳政令を求める利害関係がなくなる。戦国大名は、占領地に兵糧提供の見返りに徳政令で対応したりするが、領国内で徳政を行わないことで社会の安定を目指す。戦国時代は混乱の時代ではなく、室町時代の混乱が収束していく道行き。それが後の近世社会の安定・成長につながる。

室町時代の状況は、現代アメリカ経済に似ているかも知れない。アメリカ国民は、借金をしてでも所得以上の支出をして、世界の需要不足を吸収していた。しかし、バブル経済で借金が限界まで達した末に、リーマンショックがおとずれた。多くの債務放棄や公金投入があったが、これは「現代の徳政令」と言えるのかも知れない。

**【コラム】印鑑行政のはじまり**

日本では、文書に本人であることを示すために印鑑を押すのが一般的でしたが、批判を受けて署名や暗証番号なども可能にするようになりました。クレジットカードを使ったときに、署名を確かめない店員が多かったりして、署名もあやしいところがあります。暗証番号も推定されたり、盗み見られたりして安心できません。印鑑には合理性はないのでしょうか。

決定文書に印鑑を押すのが一般的になったのは、戦国時代です。甲州の武田家がはじまりということです。守護大名が戦国大名になったことで、公文書発行がかなり増えました。守護大名の時代は、形だけでも知れませんが、足利将軍の決定や掟に従って支配・行政を行ってきたので、守護大名の名前で文書をたくさん発行することがありませんでした。それが、室町幕府から独立して領国支配をするようになると、戦国大名の責任で文書発行をすることが多くなり、一々署名（花押：かおう）するのが大変になりました。そこで、行政効率を上げるために印鑑を使うようになったということです。別の説もありえると思いますが、印鑑は一種の印刷技術なので、効率が上がったのはまちがいありません。

**【参考文献】**

『日本経済の歴史I 中世』深尾京司、中村尚史、中村真幸編 岩波書店 2017年

『徳政令』早島大祐 講談社現代新書2490 2018年

『中世の借金事情』井原今朝男 吉川弘文館 2009年

『日本の中世貨幣と東アジア』中島圭一編 勉誠社 2022年

**◆予告**

今回は、江戸時代の経済政策を考えます。戦（いくさ）もなく、徳政令も出さずに経済運営ができるようになるのでしょうか。

市民科学研究室の活動は皆様からのご支援で成り立っています。『市民研通信』の記事論文の執筆や発行も同様です。もしこの記事や論文に興味深いと感じていただけるのであれば、ぜひ以下のサイトからワンコイン（100円）でのカンパをお願いします。小さな力が集まって世の中を変えていく確かな力となる—そんな営みの一歩だと思っていたら幸いです。

**ワンコインカンパ**

←ここをクリック（市民研の支払いサイトに繋がります）